



Vision

発想の転換を！ —イチローの活躍に見る比較文化論—

岡山大学・医歯薬学総合研究科・細胞生理学
(医学部・第一生理学教室)

松井秀樹

生理学雑誌のVISION欄は生理学会の先生方のお考えや人柄を知ることのできる有意義な欄です。高尚な文章を拝見することが多く、楽しみに読ませて頂いています。この度編集長から「堅苦しくないように書いて欲しい」との注釈付きで執筆依頼をいただいたので思いつくまま記すことにします。

近頃は日本中が発想の転換や価値観の変化を迫られる出来事に満ちています。例えば、有名な会社の派手な敵対的買収（要するに乗っ取り）、くの一刺客、小泉チルドレンなどなど。スポーツ界でもホリエモン騒動に楽天イーグルスの発足、大リーグ野球ブームといろいろ話題も豊富です。

それにつけても米国で行われている大リーグ野球の試合がリアルタイムに日本で放映され高視聴率を稼いでいるのは驚きというほかありません。大部分はイチロー、松井、井口といった人気者の日本人選手の出場試合で、しかも休日の午前中にゆっくり観戦できるので有り難い限りです。しかも最初から終了まで完全中継でうるさいコマーシャルで煩わされることもなく見られます。正直に言って以前の私は大リーグ野球にそれほど興味はありませんでした。しかし最近気がつく結構楽しんでます。なんとと言ってもイチローの小気味よい守備やバッティングに胸のすく思いがするの私だけではないでしょう。

ちょっとイチローの野球について考えてみましょう。彼の野球は私が持っていた大リーグ野球のイメージと全く異なっています。以前のイメージでは、マクグアイヤーやボンズといったムキムキ・マッチョマンが派手にバットを振り回し、ホームランか、さもなければ派手な空振り三振という感じ。それまで三振の山を築いていたピッチャーが突然ポコッとホームランを打たれるといった大味な野球です。まるで靴底みたいに大きくて固い、そしてきわめて不味いアメリカン・ステーキみたいなものでした。もちろん日本の野球みたいに意味のない駆け引きとサインの交換が無いぶんテンポがあったのですが、しかしおもしろさには欠けました。

イチローはどうでしょうか？決してバットを大振りして、長打を狙うことはありません。むしろボールをうまく地面にころがしたり、セーフティバントによって出塁する。あるいは守備の隙間を狙ってヒットするといった職人芸が目立ちます。イチローのデビュー当時ならいざ知らず現在ではその攻め方は良く知られていて、守備陣もいろいろ位置を変えたり極端な守備シフトをとったりしますが、その結果生じる守備の弱点を逆にイチローに抜かれて出塁を許してしまいます。イチローは大変簡単にやっているよう見えますが、実は大変なことだと思います。守備の弱点は広いフィー

ルドの限られたところにしかない訳で、そこに確実にボールを運ばねばなりません。しかもピッチャーの変化する球に対応してボールの打ち方を変えなければなりません。ピッチャーにしてみればイチローをうまく討ち取ったはずなのに、なぜか一塁に進塁してしまうわけで、これくらい厭なバッターはないでしょう。内野手もスピードについて行こうとしてボールの処理を焦ってしまい、よけいにエラーしてしまうという結果になります。出塁した後は絶妙のタイミングと俊足で盗塁し、味方のヒットか犠牲打で得点を追加するというまさに野球の原点を見るようです。

さて、ではイチローの大リーグ野球における意義は何でしょうか？それは大リーグ野球のおもしろさの概念を変えたことでしょうか。ホームランを豪快にかつ飛ばす野球のおもしろさから、精緻に組み立て、計算し尽くした技術の発露への発想の転換です。もちろん豪快な野球は今でも大リーグの醍醐味ですし、決して無くなりません。そしてもちろん緻密な野球は以前からあったと思います。しかし緻密な野球のおもしろさは目先の派手さに惑わされて忘れていたものです。これをもう一度再認識させ、発想の転換をさせたという点でイチローの存在意義はきわめて重要だと思います。

イチローが大リーグに挑戦するとき、当時の主流であるボンズやマクグアイヤー、ソーサといった人達と渡り合うようなアメリカ野球を目指したとすれば何も生まれなかったでしょう。もちろんイチローがものすごい筋肉トレーニングをしたこ

とは彼の現在の写真とオリックス時代の写真を比べればすぐわかります。しかしそのトレーニングはマクグアイヤーになるためのものではありませんでした。かれが単に筋肉量を増加するためではなく、瞬発力を生み出すためのトレーニング（いわゆる初動負荷トレーニング）で高い成果を挙げた事は知るヒトぞ知るところです。つまりイチローは自分の長所と弱点をしっかりと見極め、それまでの大リーグ的な発想を転換して、どうすれば勝てるかを冷静に分析し、実行したということです。

何かで競い合うときに勝つためには2つの方法しかありません。

- 1) 競争相手と同じ事をするなら先にやってしまう。あるいははるかに速いスピードで成し遂げる。
- 2) あるいは発想を転換し競争相手がまねの出来ない全く別のやり方でやり遂げる。

医学研究の分野で1)を成し遂げ勝利を収めた日本人の代表は「野口英世」です。しかし、野口もロックフェラーという米国の大富豪と細菌学者のフレックスナーという巨大な後ろ盾があって物量作戦が可能となり、それによって成功したのです。例外的だと思います。日本が21世紀に勝ち残るには2)を目指す必要があると思います。やはりアイデア、創意工夫、器用さ、相互の連携の巧みさ、といった我々の得意な土俵で勝負しなければならないと思います。大リーグ野球の概念を変えたイチローの様なやり方が出来る研究者を育てたいと思いますし、私もそうなりたいと考えます。皆さんは如何ですか？